

Ⅰ 前立腺癌に対するホルモン療法に伴う ホットフラッシュに対する 桂枝茯苓丸の効果

金沢大学大学院医薬保健学総合研究科 泌尿器科

重原 一慶、新澤 玲、高田 真吾、
福川 孝太郎、川口 昌平、野原 隆弘、
泉 浩二、溝上 敦

【目的】前立腺癌に対するホルモン療法の主軸はアンドロゲン除去療法である。非侵襲的治療を好む国民性のみならず、諸外国と比較して治療に伴う性機能障害を許容する患者が多いことから、本邦ではホルモン療法は高齢者を中心に多く使用されている。ホルモン療法に伴うのぼせ・ほてり等のホットフラッシュは、約80%に出現するといわれている一方で、その有効な治療は確立していない。前立腺癌患者のホルモン療法に伴うホットフラッシュに対する桂枝茯苓丸の有効性及び安全性について後ろ向きに検討した。

【対象と方法】2018年1月～2024年9月の間に、ホルモン療法を施行している前立腺癌患者でホットフラッシュを自覚して、その治療として初めて桂枝茯苓丸（ツムラ25）を投与した102症例を対象とした。薬剤投与後3か月目に自覚症状の改善の有無、継続希望の有無、副作用について問診した。有効性は、自覚症状の改善の程度から「無効」「やや有効」「有効」「著効」の4段階で評価した。また薬剤の継続希望率、継続期間について調査した。次に、「やや有効」以上を奏効群として、奏効群と無効群とで患者背景を比較した。以前に桂枝茯苓丸を投与した既往のある症例は除外した。

【結果】患者の平均年齢は72.2歳、ホルモン療法開始から桂枝茯苓丸投与までの平均期間は14.5か月（0-133か月）であった。3か月目の効果判定では著効3例、有効11例、やや有効36例、無効52例であった。やや有効以上の奏効群は50例（49%）であった。一方、3か月以降も継続を希望した患者は56例であり、「無効」でも投与継続する症例が存在した。次に奏効群と無効群を分けて患者背景を比較したところ、年齢、BMI、併存疾患（高血圧、糖尿病、神経疾患）、ホルモン療法の種類、ステージ、ホルモン療法開始から桂枝茯苓丸投与までの期間については両群間に差は認めなかったが、有効群では放射線治療歴のある症例が有意に多かった（ $p=0.0277$ ）。奏効群におけるその後の薬剤継続期間は平均13.7か月（2～53か月）であった。副作用で中止となった症例は6例であり、痒み3例、軟便・悪夢・内服困難がそれぞれ1例であった。

【結論】前立腺癌に対するホルモン療法に伴うホットフラッシュに対して桂枝茯苓丸は一定の効果を認めた。今後は、証に応じていくつかの漢方薬使い分けて治療した際の有効性について検討したい。